

アートを歩く

「ジャカジャカジャカ」

布を切るはさみの音がアトリエに響く。型紙を使わず布をフリーハンドで裁断し、3〜4台のミシンを使い分けながら縫い上げていく。素材は、こだわりのリネン（麻）やオーガニックコットン（有機栽培の綿）など。

一点として同じ作品はない。立体の仕上りをイメージしながら、手が覚えた感覚で布を裁つ。「これ以上引き算ができない」というシンプルなデザイン。着ると、布が人の体温を感じて優しく身体ラインに沿って形を作ってくれる。どんな体形の人にもスーツとなじむ。夏は涼しく、冬は温かい、オールシーズン

高知美術研究会 北 泰子

の服だ。

制作者は天然服工房「ロプチ・プラム」の松井浩子さん。2013年4月に福島から高知に移り住んだ。

1961年、神戸市生まれ。東京の獣医大を卒業後、大学で知り合った福島県出身の男性と結婚。同県郡山市で25年間暮らしてきた。2人の子供が10歳になるまでは子育てに専念。その後はフォトスタジオのカメラマンや、精神科クリニックの世話人など、幅広い仕事を経験してきた。

東日本大震災で多くのものを失った。郡山市は原発から60キロ離れているが、事故後「みんなが『夢や希望、未来』を語るこ

手作りの服が並ぶロプチ・プラムの店内
—高知市薊野北町で



を押され、福島を出ることを決意。「外から福島の復興を考えてみたい」と単身、高知に引っ越した。「高知が私を呼んでくれたような気がした」

高知で何ができるか考えた時に「母の影響で縫い物が生活の一部だった。洋服で自分を表現しよう」と決めた。沢田マンション（高知市薊野北町）の3階に住まいを借り、

らない人気店になっている。

オリジナルブランド、チュニックやワンピース「ロプチユ」やクローバルかっぽろ着「タアポ」。おしゃれを知り尽くした世代、ミドルエージからアクティブシニアの女性に支持され、口コミで確実にファンを増やしている。ネット通販も始め、PRを担当する池田早雄さんは「彼女の作品は全国に発信していける力がある」。ホームベースやパンフレットの制作を手伝う。

「リネンやコットンは、私を表現する絵の具とキャンパス。だから天然の良いものを使う。1着1着が自分の作品。さまざまな思い、培ってきた技術、伝えたいことが1着の服に詰まっている。天然素材は土に返ることができ。それが大切なんです。原発事故を目の当たりにして思ったのは、過去は変えられないが未来は変えられる。今からどう

心と体 寄り添う天然素材

とができなくなってしまう。2年間は紆余曲折を経ながら、復興のため必死に頑張った。

しかし「いくら頑張っても頑張っても前に進めなかった」。自分の人生だから、好きなことをやったらいいよ」という長女の言葉に背中

服作りの第一歩を踏み出した。「1枚の布からスタートした服が売れた時の感動は今も忘れない」という。その後、

池公園（同市池）で毎週土曜に開催されている「高知オーガニックマーケット」に出店がかない、昨年11月で丸1年。今やマーケットになくてはな

するかが大切だということ。高知で力を付け、福島の復興の一助になりたい」と力を込める。

彼女の作る服は、優しいが、力強く、心と体に寄り添ってくれる。高知から全国、そして世界中で愛される服になるに違いない。



高知オーガニックマーケットに出店する松井さん。「高知で力を付け、福島の復興の一助になりたい」
—高知市池の池公園で



①リネンの「ロプチユ」—高知市池の池公園で
②リネンの「タアポ」—高知市薊野北町の「ロプチ・プラム」で